



もう、そこにいる...

b-ryuf-b

小田 秀和〔おだ ひでかず〕 29歳 救急隊員
砂那〔サナ〕 ?歳(外見は20代前半) 交通事故現場に居合わせた女性
湯川 麻美〔ゆかわ あさみ〕 33歳 救急救命士 小田の同僚
湯川 彩〔あや〕 9歳 麻美の娘
武市 信夫〔たけち のぶお〕 34歳 医師
服部〔はっとり〕 25歳 警官
堀田〔ほった〕 42歳 警察署長
沖田 正嗣〔おきた まさつぐ〕 61歳 政権与党の衆議院議員、元・国務相
近藤 栄治〔こんどう えいじ〕 44歳 沖田の第一秘書
播〔バン〕 環境保護団体のNPO「ARK」の支部長
遊馬〔ユマ〕 ARKメンバー 副支部長
羽山 雪〔はやま ゆき〕 13歳 ARKにボランティア参加
羽山 孝四郎〔はやま こうしろう〕 70歳 雪の祖父 右翼団体の長
乾〔いぬい〕 24歳 『狂犬』と呼ばれる殺人マニア

東京都郊外・大通り交差点

昼下がりに、さして混雑してもいない交差点へ、脇をすり抜けたバイクが突っ込んでいく。信号が黄から赤へ。

歩道を歩くサナ〔砂那〕がその信号を見やっていると、凄まじいブレーキ音が轟く。

サナ「?!」

大型ダンプの右折に巻き込まれたバイクが、巨大なタイヤの下へ吸い込まれる。

ダンプの後輪から飛び出すように、バイクを運転していた若者が歩道へと転がり込む。立ち上がろうとするが、片脚が切断されかけていて横転する。

サナの目の前だ。鮮血が飛び散り、少しサナの顔に付く。

サナ「?・・(鼻腔近くに触れ、顔に付着した血を見る)」

地面でうめく若者。人が集まってくる。

サナは独り茫然と立ち尽くし、手に付いた赤い血を見つめている。

事故現場～救急車

交差点には野次馬がたかり、警察車両が事故現場を封鎖している。

到着した救急車から小田秀和と湯川麻美が降りてきて、警官から事情を聞く。

茫然自失したサナは、重傷の若者のかたわらに立ち尽くして、地面の赤い血溜まりを見ている。

秀和「?…(サナに気付く)」

すぐさま応急処置(止血など)をして、担架で重傷者を救急車へ運び込む。

サナは、その場を動かない。

秀和「この人の身内の方ですか？」

サナ「…(無反応)」

麻美が「急いで」と秀和を呼ぶ。

野次馬から「あの子ずっと寄り添ってたな」「恋人じゃない？」などの言葉を聞きとりあえずサナの手を取る秀和。

サナ「…(地面の血溜まりを見つめたまま)」

秀和「乗って下さい。急いで！」

引っ張るようにサナを乗せ、自分も乗り込んで扉を閉める。

救急車・車内

無線で重症患者の情報を伝え、受け入れ先を探す秀和。

救命士の麻美は、患者の呼吸確保や輸血処置を行っている。

ベッドの傍らに座ったサナは、焦点の合わない目で茫然と胸を押さえている。

目前に広がる血のためか、ひどい顔色で嘔吐感に堪えているようにも見える。

秀和は、受入先の病院を運転手に指示して、患者の処置を手伝う。

大量失血で危険な状態にある患者を診ながら、ふとサナを見やる。心配になり、

秀和「大丈夫ですか？…あの」

サナ「…（聞こえていない）」

秀和は輸血用の袋を持ったままサナに近付く。

と、車が揺れて、袋をサナの顔に押し当ててしまう。

秀和「あ、すみません、大丈夫？」

サナ「？・・・（我に返る）」

途端に、急激な吐き気に襲われてベッドの足元に嘔吐するサナ。

ベッドの血を避けようとして、金具で腕を傷つけてしまう。

秀和「大丈夫ですか？スグ手当てを」

サナ「来ないで！」

秀和は戸惑いながら、今目にしたものについて考える。

サナの腕から流れていた血。傷口からの出血を、サナは咄嗟に隠したが、それは見慣れた色ではなかった。黄色い血だった。血が、黄色い？

秀和「…（息も忘れている）」

サナ「…」

麻美「心拍低下。小田、何してんの！」

患者の容態変化に、我に返った秀和が職務に意識を戻す。

サナは、秀和を窺いながら座り直す。

病院

麻美と秀和が患者を引き渡す。

医師・武市信夫が、患者の容態を聞きながら処置室へ運ぶ。

秀和「よろしくお願いします」

武市「はい、ご苦労様」

武市の満面の笑みに圧倒されながら、秀和は患者を見送って外へ戻る。

気になって救急車の中を覗くと、誰もいない。

秀和「どこ行った、さっきのコ？」

運転手「さぁ？見てないけど」

秀和は辺りを見回し、探してみる。

麻美「いないの？」

秀和「どこ行っちゃったのかな」

麻美「受付じゃないの？あれ、身内でしょ」

秀和「ン…そっかな」

無線指示が入り、運転手が2人に戻るよう伝える。

麻美と秀和は救急車に乗り込み、病院を後にする。

秀和「…（不安と、疑問）」

同・救急救命病棟（夜）

勤務が明けた私服の秀和が訪ねてくる。

自分が搬送したバイクの重症患者は、手術を終えて眠っている。

看護師に、その患者の付き添いや身内は、と尋ねてみる。

看護師「ご両親が先程までいらっしやいましたよ」

秀和「あの女の子は？救急車で一緒に来た」

看護師「？...いえ、みえたのはご両親だけでしたよ」

首を傾げる看護師に礼を言って、病棟を出る秀和。そこへ武市に出くわす。

秀和「どうも」

武市「やあ。どうしたの？」

秀和「ちょっと気になったんで」

武市「大丈夫、足はともかく、もう危険はないよ。失血の方が問題だったね」

秀和は、少し迷ったが打ち明けることにする。

秀和「先生。ちょっと、いいですか？」

武市「？どうぞ」

武市の個室に案内される秀和。

武市は備付の蒸留水をコップに汲んで、秀和にも手渡す。

武市「どうしたの？身内で病気か何か？」

秀和「いえ、そういうんじゃないで」

武市の笑顔は仮面のように張り付き、ジッと秀和を待っている。

秀和「やっぱ...やっぱ、いいです。すいません、時間とらせちゃって」

武市「僕は構わないけど」

秀和「すいません、本当」

武市「言ってスッキリするなら、聞くよ」

秀和「いや、やっぱ、見間違いだと思うし」

武市「見間違い？」

秀和「ええ。血が黄色い、なんて、あるわけないですよ」

ほんの一瞬の事で秀和は気付かなかったが、武市は表情を激しく変えていた。

素早く平静を装って、笑顔で、

武市「何だい、それ？」

秀和「いえ、あの患者と一緒にここまで来た女の人がいたんですけど、車の中で

ちょっと怪我しちゃって。でも、やっぱ見間違いです。すいません、変な話」

武市「あの患者の？友人、かな」

秀和「違ったみたいです、病室にも顔を出してないし。現場にただ居あわせた

だけかも。だったら、悪いことしちゃったなと思って」

何度も詫びながら帰っていく秀和を、武市は笑顔で見送る。

秀和が去った途端、笑顔は引きつった不気味な様相に変わる。

電話をかける。

武市「相談だ。すぐ来い」

羽山邸（夜）

高級住宅が並ぶ一角にある、いかめしい塀と監視カメラに囲まれた邸。

中学の制服姿の羽山雪が帰宅する。

雪「ただいまー」

電話していた羽山孝四郎が、受話器を押さえて出迎える。

羽山「おかえり、雪。遅かったな」

雪「ARKに寄ってたの。お手伝い」

羽山「携帯に電話したんだぞ」

雪「大丈夫、送ってもらったし。おじいちゃん、心配しすぎ」

羽山「当然だろ。おい、雪？ご飯は」

雪「食べたア」

楽しそうに声を弾ませて2階へ行く。

羽山は溺愛ぶりを発揮しながら2階を見やり、ふと真顔に戻る。

自室に入り、電話に出る。

羽山「すまなかった。その件はそれでいい。もう一つは？...あの医者が、またでしゃばるのか...好きにさせておけばいいだろう、そこまで面倒をみてやる義理はない」

空調ランプを気にしながら葉巻を吸う。

ためいき混じりに電話を切り、葉巻を消す。

ソファに深く腰を埋めて天井を見上げる。

羽山「関係ない...雪さえ幸せになるなら。あの子だけでも、せめて...」

呟いたことに自分で苛立ち、苦々しげにブランデーを飲み干す。

床の間の日本刀に、静かに見入る羽山。

机上スタンドの写真には、孫娘（雪）の笑顔。

湯川家【マンション】

出迎える湯川彩にケーキを渡す秀和。

彩「またケーキ？しかもコンビニの」

秀和「え？コレ気に入ってたじゃん」

彩と同じ目線までしゃがみ込む。

彩「たまには女性が喜ぶようなものでも持ってきたら、少しは見所あるのに」

秀和「誰のことを言ってるのかな？」

彩「(自分を指差し)ほらほら」

秀和「(立って見回す)どこ？ねえ、どこ？」

奥から麻美に呼ばれて「お邪魔してます」と部屋に入っていく。

彩から蹴られるが、笑ってあしらう。

競馬新聞片手にくわえ煙草の麻美が、「よう」と秀和に手を挙げる。

ビールの空缶を灰皿に、赤鉛筆を指で回転させてうなっている。

そんなオヤジスタイルも似合っているから得だ。

秀和「(当たり馬券を)とった？」

麻美「聞くな、ばかたれ」

秀和は、笑いながら麻美にビールを差し入れる。

喜ぶ麻美の手から麦酒を奪う彩。ついで煙草も口から取り上げて、空缶に入れて片付けてしまう。

麻美「彩あ～(甘え声)」

彩「(ピシャッと)今日の分はおしまい」

ふて腐れる麻美をヨソにテキパキ片付けた彩は、ジュースとケーキを手に、
彩「では、ティータイムなのでこれで。ママたちはどうぞごゆっくり」

手を振る秀和に舌を出して自室へ行く彩。

秀和「チェック厳しくなったなあ、彩ちゃん」

麻美「お前、好かれてんだよ。で、どした？」

秀和「アンタが来いって言ったでしょ」

麻美「やたら気にしてたからさ。どうなったかと思ってね」

秀和「何が？」

麻美「探してるんだろ、一緒に乗せた子」

秀和「別に。患者の身内じゃなかったみたいで、もし見つかったら謝んなきゃ、と」

麻美「ほれたか？」

秀和「すぐそれだ（笑）そんなんじゃないスよ」

麻美「いいや、お前にしっちゃ気かけすぎだよ。吐けコノヤロ」

明らかに秀和をからかって楽しんでいる。

秀和「（少しだけ迷って）もし...もしも、ね」

麻美「ン？」

秀和「もしも、なんだけど、もしも.....」

麻美「（叩く）早くしろ」

秀和「（痛い）血が、さ...血が、黄色かったら、どうする？」

麻美「...は??」

同・表

サナがマンションを窺っている。車の音に敏感に反応して身を隠す。

マンションの前にパトカーが停まり、武市と共に、服部が降りて来る。

2人は端末で位置を確認しながらマンションへ入って行く。

サナ「...」

同・湯川家

煙草に火をつける麻美。

秀和「どう、思う？」

麻美「どうってもねえ...ハッキリ見たワケじゃないんだろ？」

秀和「そりゃ、まあ」

麻美「誰かに話したかい？」

秀和「えっと...先生、だけ。武市先生」

麻美「スマイルか。何か言ってた？」

秀和「いや、見間違いだと思っただけだから。信じちゃもらえないよ、普通」

麻美「アタシなら信じると思ったのか？」

秀和「いや。でも話せって言うから」

麻美「で？見つけたらどうすんの」

秀和「どう？って...」

麻美「じれったいね（叩く）本当にその子の血の色が黄色かったら、お前どうすんの？」

警察にでも言うか？宇宙人を捕まえました、とかさ。あ、TV出れるぞ」

秀和「宇宙人って...」

麻美「じゃ、何なのさ」

秀和「...」

呼鈴が鳴る。なぜか緊張する2人。

彩が部屋から出てインターホンに応えるのが聞こえる。

麻美「誰だ？」

彩「オダに用だって。警察」

思わず顔を見合わせる秀和と麻美。秀和が、立って玄関へ向かう。

彩が玄関を開けると、武市と服部が顔を出す。

武市「やぁ（爽やかな笑顔）」

秀和「武市先生？」

服部「恐れ入ります（敬礼）少しお話をうかがいたいのですが、よろしいでしょうか」

武市「そんなに警戒しなくても大丈夫、彼は僕の知り合いでね。彼が是非、小田クンと話したいって言うもんだから」

秀和「はあ...（困惑）構いませんけど」

武市と服部は中に入って、彩がスリッパを出す際に、さり気なく鍵を閉める。

奥へ行くと、麻美はTVの競馬中継を観てくつろいでいる。

武市に会釈だけして、彩を呼ぶ。

秀和「あの、どうしてココが...」

服部「（遮るように）早速ですが、貴方はその女性が血を流すところを見たんですね」

秀和「あ、はい。でも...（小声で）本当に黄色かったかどうか自信は...見間違えただけのような気もしてて」

武市「会ってみたいそうなんだ。その女性にもう一度会ったら、わかるよね？」

秀和「そりゃまあ...わかる、と思いますけど」

服部「結構です。大変、結構」

服部に握手を求められて、無意識に手を差し出す秀和。

服部は、その秀和の手に消音器〔サイレンサー〕付自動拳銃を握らせる。

秀和が事態の異常さに気付くよりも早く、そのままソファ越しに麻美と彩を撃つ。

何発も貫通した弾丸は、ほとんど声もなく湯川母娘を倒している。

秀和「?!?・・・」

余りに唐突のことで、頭が理解できない。

目の前で同僚が殺された。その娘も一緒に殺された。

人間が殺された。警官に殺された。殺した拳銃を、自分が持たされている。

その事実が頭で理解されるまでに、激しい震えが襲ってきた。

服部は、秀和の手から拳銃を取り上げ、床に放る。

その音にビクッとすくみ上がる秀和。異常すぎる状況についていけてない。

忍び笑いが聞こえる。心から楽しんでいる、そんな響きを持った笑いが重なる。

武市と服部が笑っている。

秀和の脳はパニックを起こしている。恐怖が思考を麻痺させている。

意思ではなく、身体が勝手に足を前へ出す。麻美の死体が見える。

大量出血で、まだかすかに痙攣している。彩は？

彩は、その傍らで死んでいる。

秀和がソファに触れると、手にべっとりと血が付く。動悸が激しすぎて息苦しい。

武市「小田くん」

心臓が停まるほど驚く秀和。

振り返ると、武市と服部は、そんな秀和の様子も楽しくて仕方がないらしく、ニヤニヤと秀和を見物している。

秀和「... (逃げたい。逃げたい。逃げたい逃げたい逃げたい...)」

身体が思うように動かない。少しでも遠ざかろうともがいて、ソファを転がる。血溜まりから這いずって逃げようとする。

また嘲笑が起こり、「手を貸してやろうか」などの声が聞こえる。

パニックだ。完全にパニックだ。秀和は、死に物狂いで両手両足をバラバラに動かし、何とか彼らから逃げようとするが、遅々として進まない。

武市「小田くん。我々はイエロー...君が見た女に用があるんだ。一緒に探してくれないか？悪いようにはしない」

服部「(恍惚) たまんねえなあ、この色！匂い！赤も悪くねえや...なあ？」

部屋の隅に身をよじる秀和に、笑いながら近づいて来る。

秀和は、情けなく「アーン」と何度も叫びながら手を振って怯える。

銃撃で割れたケーキの皿の破片を服部にぶつける。

避けた服部は、血溜まりに足を取られて転び、皿の破片に手をつけてしまう。

服部「？・・・おお？！（震える）」

段々と服部の表情が恐慌へと変わる。破片で怪我した手から血が出ている。

服部の血の色は、青い。濃い粘液状の青だ。

秀和「？.....血が、青...」

武市「てめえ、何を...」

武市は、穏やかな笑みの仮面を脱ぎ捨て、憎々しい表情に一変している。

服部が、情けない顔で助けを求めるように武市に手を出す。

武市「おい、よせ」

武市も青い血を必死に避けようとする。どうやら服部も武市も青い血を苦手としているらしい。

秀和は、麻美の死体に気付いて我に返り、慌ててベランダへ逃げる。

3階ベランダから下を見る。

狭い隙間に木が生えているが、飛び移るのはかなり危険だ。

迷っていると、後ろから武市が迫ってくる。狂気の顔。

その時、外から武市へ向かって何かのカプセルが投げつけられる。

破裂したカプセルから飛び散った液体が、武市の顔や上半身を青く染める。

悲鳴を上げて青い液を拭おうとする武市。

秀和「?!...」

外を見ると、堀からよじ登ってきて木につかまっているサナが見える。

サナは、カプセルを手にしたまま秀和を呼ぶ。

サナ「早く！急いで！」

秀和はやっとパニック状態から脱して、木に飛び移る。

枝を折りながらも、何とか地面まで降りる。

ホッとするのもつかの間、すぐさまサナに引きずられるようにその場を去る。

ベランダに出てきた服部が拳銃で撃とうとするのを、武市が制する。

武市「やってくれたな」

服部「どうする？」

武市「署長に言え。人手が要るだろ」

服部「(怒りを煮えたぎらせる)劣等種が...殺してやる!殺してやる!」

武市「これはお前のミスだ。俺は関知せんからな」

公園

サナは携帯電話を路上駐車された車の下へテープで貼り付けて、公園へ入る。

公衆便所の方を窺いながら外を見張る。

公衆便所の中では、秀和が汚れた服を目立たない服に着替えている。

まだパニックが抜けず、虚脱しているような頼りなさだ。

秀和は、外へ出て、サナに汚れた服を差し出す。

サナ「(冷静そのもの)捨てておいて」

秀和「... (言われた通りにする)」

サナ「行きましょう。携帯は処分させてもらいました。持っている、また居所をつかまれます。出来るだけここから離れないと」

秀和「... (ただ、ついていく)」

バスが近づいてくるのが見える。サナが秀和を引っ張る。引きずるように。

バス車内

乗客は少なく、話を聞かれる心配もないほど離れている。

最後尾に座って、やっと一息つくサナ。隣の秀和を見やり、ため息づく。

サナ「大丈夫、ですか？」

秀和「... (うつむいたまま)」

サナ「私のミスもありました。その点はお詫びします」

秀和「... (呟く)警察」

サナ「？」

秀和「警察に行かないと...麻美さんと、彩ちゃんが...殺された...ころ、され、・・・」

サナ「... (息を整えて)お気の毒です。でも、警察には行きません。行けない、と言った方が正しいですね」

秀和「何で?殺人だよ?俺も殺されそうに...」

サナ「彼らがもう報告してるでしょう。多分、貴方が犯人ということにされてます」

秀和「?(歪んだ笑みを浮かべる)俺が?なんで??」

サナ「恐らく間違ありません。あれは本物の警官です。職業が、という意味ですが」

秀和「何で、アンタに、そんなことが?」

サナ「それが彼らのやり口だからです」

秀和「?...」

サナ「貴方が見た通り...私は貴方たちとは違います。見た目以外、全てが違います」

小型ナイフを取り出し、指を少しだけ切りつけ、血を出して見せる。

黄色い。

ハンカチで血を拭き取り、秀和に渡す。

秀和「... (茫然)」

ハンカチに付いた黄色い血をジッと見つめる秀和。

サナは、指に消毒スプレーをつけ絆創膏を貼る。

秀和からハンカチを返させて、消臭剤を包んでからしまう。

鼻を鳴らす秀和に、

サナ「柑橘〔かんきつ〕系の匂いがしたでしょう？」

秀和「?... (頷く)」

サナ「独特の匂いを持っています。匂いを嗅ぎつけられたら大変なことになる」

秀和「... (茫然とサナを見る)」

サナ「見られてしまった時、すぐに詳しく話していれば、手遅れにならず済んだかも

知れません。重ねて、お詫びします」

秀和「あいつの血...青、だった。青かった」

サナ「彼らはシアン...青い血を持つ種族です。私たちの星を滅ぼした、凶悪な種族...」

秀和「.....宇宙、人？」

サナ「...陳腐かも知れませんが、そうなります」

秀和は、まっすぐに見返してくるサナから目を逸らし、うなだれるままでいる。

バスが停留所に着き、10代の若者たち7~8人が騒がしく乗り込んでくる。

サナたちの近くまで来て、ことさら大声で騒ぎ始める。

「まじウゼエよアイツぜってえ殺す」「まじマジ」「超トロクね？このバス」

「喉かわいたあ」「何か持って来て」「シヨンベン飲んでろ」「アンモニア飲むか」

「飲めるって」「バカだねえ」「あ、結構可愛い」「ヤリてえ」「出世払いで」

「しねえよ」「自販機置いとけ」「デート？ねえデート？」「俺とも付き合ってえ」

「でもってヤラして」「カラオケ行こカラオケ」「イイもんあげるよ」

脈絡ない会話をしながら、サナをもネタにして騒いでいる。

人数が集まっている時だけ強気になって注目を浴びたがるクセに、常に匿名で

いたいという典型のような集団。

秀和は関わらないよう顔を上げなかったが、サナは無表情に集団を見すえている。

「なーにお姉さん、なーに？」「ヤリてえんだ」「何、好きモンなの」

「コイツ俺らのことにらんでね？」「刺しちゃおっか」「誰だよ怒らしたの？」

サナ「(冷静) 貴方たちはシアンですか？それとも、マゼンタですか？」

集団が一瞬沈黙した後、爆笑する。

「おーい、お姉さーん」「イツちゃってるよ」「凄エ」

「ヤベえよ自分ワールド入ったよ」「ここから出してくれ」「死んどくか」

秀和「(サナに) 降りよう」

サナの手を取り、降車ボタンを押して前へ移ろうとする。

集団の1人が通路を塞ぐ。

秀和「すみません」

通ろうとするが、足をどけない。

「オジサン震えてる?」「ビビってるビビってる」「泣く?泣いちゃうの?」

秀和は「スイマセン」「通して下さい」を繰り返すばかり。

集団は囃に乗ってサナの肩や髪を触ってくる。

が、サナは毅然として動じない。

サナ「貴方がたが特別というワケではないことはわかっています。ヒトは、群れると威を張りたくなるものだから...それは、マゼンタやシアンに限らない」

ティーンエイジ集団が、ますますからかう。

「ヤベッ怒られちゃったよ」「説教?」「教育スキスキ」

サナ「ここで本当のことを話しても、信じてもらえない。でもあえて言うなら、今この瞬間も、貴方がたはシアンの侵略を受けています。侵略されつつあります」

大爆笑される。

「何これ?SF?」「ヤッペエ、2chでスレ立つわ」「なんかの新興宗教か?」

「撮影だよバカ」「おもしろェじゃん」

と冷やかされる。が、サナは冷静に声を鋭くしていく。

サナ「食肉に始まって、いずれ魚介類も安全に食べられなくなっていく。大気と水と土壌の汚染が進んでいく。それが人体に、全ての生物に深刻な影響を及ぼすのは、もう時間の問題でしかない」

秀和「... (サナを見やる)」

サナはただ正面を見て動ぜず話しているだけだが、穏やかでも強い語気と態度。

ティーンエイジ集団は、次第に不安になってきている。

サナ「温暖化。放射性物質。異常気象。生態系の破壊。種の絶滅と異常繁殖...

気付くのはいつも、手遅れになってしまってから」

目を閉じるサナ。

秀和「...」

サナ「ですが、シアンたちは、この星の人間が生きていけないような汚染された劣悪な環境を好み、そうなるよう仕向けている...これが、今現在の真実です」

サナは毅然として集団を突き抜け、秀和の手を引いてバスを降りる。

集団は、啞然として、ただ見送っている。

警察署(夕)

人員が集められ、手配書が配られている。壁にも張られている写真の主は、秀和。

堀田は、部下たちのキビキビした動きを満足げに見回っている。

服部が近づいて来て、堀田に耳打ちする。

服部「署長、全ての応援要請は済んでいます、機捜が説明を求めてきたようです」

堀田「ん?あそこは、まだ赤だったか」

服部「はい」

堀田「そのうち人選だな。じゃ、行け」

服部「はい。あと、沖田先生がお見えに」

堀田「...おい」

笑顔で服部の耳をつかみ、その耳元へ、意味不明の言語を発する。

青ざめた服部を残し、エレベーターに向かう堀田。

その短いやり取りに気付いた者は、誰もいない。

同・署長室（夕）

沖田正嗣が待ち構えている。

部屋に戻ってきた堀田とガッシリ抱き合い、豪快に叩く。

脇で控えている近藤栄治が、堀田へ鞆ケースを手渡す。

沖田「土産や。とっとき」

堀田「わざわざありがとうございます、先生。それでは遠慮なく」

沖田「コッチの物言いも板についたモンやな」

堀田「恐れ入ります」

沖田は、室内で飼われている小型犬を見て、微かに舌なめずりする。

沖田「なぁチビ。久々のイエローで、しかも若いメスやったて？そない美味そうなんを
みすみす逃がしてしもたんか？」

堀田「お耳が早いですね」

沖田「どうするんや？」

堀田「私自ら指揮を取り、活きの良い内にお届けします。それまでは」

犬を持ち上げ、沖田へ差し出す。

近藤は、咄嗟に目をつむり、耳を強く押さえる。

次の瞬間、犬の断末魔と、骨ごと生き物を咀嚼するおぞましい音が響く。

堀田に肩を叩かれた近藤が目を開けると、口のまわりを血に染めた沖田が満足そうにゲップしている。

近藤は、あわてて沖田の口を拭き、堀田の用意したシャツの着替えを手伝う。

沖田「そや、お前も行け」

近藤「え？あの、私も、でしょうか？」

沖田「ワシや早よう報告が聞きたいんじゃ、何時何分に届くんか知りたいやろが」

近藤「は、はい」

沖田「イエロー発見したら、全部ワシんところ持ってくるちゅう約束や。なぁ？」

赤い血に塗れた犬の首輪をチラつかせる沖田。

怯えた近藤が何度も頷くと、満足したのかソファに寝転がる。

堀田は一礼して、近藤を促して退室する。

部屋の外で近藤に名刺を渡す。

堀田「警察の網にかかった後、この男に任せる。連絡して、一緒に行動しろ」

近藤「これは、元右翼の？」

堀田「同じ種族の方がやりやすかろう？」

近藤「・・・わかり、ました」

図書館内（夕）

数台のパソコンもあるインターネットコーナーの奥に、広い読書スペース。

サナと向かいに座っている秀和。本を広げたまま周囲を気にしている。

サナ「本を見てて。誰も顔を見たりしない」

秀和「...うん」

サナ「遅くまでやってるところだから。夜になったら安全なところへ。あと、コレ」
液体入りカプセルを数個渡す。

サナ「ぶつければ、破裂した中身が膨張して青い血糊〔ちのり〕になる。シアンたちはこれを極端に嫌がるの。覚えておいて」

秀和「あ、まだ、助けてもらったお礼を言ってなかった...ありがとう。えっと？」

サナ「サナです。ただの、サナ。イエローの生き残りの1人です」

秀和「えっと、ありがとう。俺は」

サナ「マゼンタの、小田秀和さん」

初めてサナが笑った（かすかに、だが）ことを、素直に喜ぶ秀和。

サナ「何です？」

秀和「え？その。笑ったから」

サナ「(無表情)本を見てて」

秀和「...はい」

沈黙...話しかけるタイミングが難しい。

秀和「あの?...(本を見たままで)何で、マゼ...とかって呼ぶの？」

サナ「便宜上、そう呼んでいるだけです。3原色にならって、黄色い血がイエロー、赤い血がマゼンタ、そして...シアン」

秀和「侵略者が、青い血...か」

サナ「シアンは血を見るのが何よりも好きな種族です。青い血以外なら。そのくせ、自分たちの血の色だけは、生理的に受けつけない」

秀和の背後を人が通る。

サナ「私たちイエローは、どんな色だろうと、血そのものが駄目なんです。見るのも、その匂いも、意識を朦朧とさせてしまう」

秀和「そっか、それである時(救急車で)...

サナ「...私たちは、ほんのわずかししか生き残らなかった。そして、家畜としてここへ連れて来られた」

秀和「...家畜」

サナ「下僕、奴隷、家畜...言葉は違えど意味は変わらない。もう帰る場所なんてない。せめてここが同じ目に遭わないように、小さな活動を起こすぐらいしか」

秀和「病院の先生も青だった...いったい、いつから？」

サナ「正確にはわからないけど、1世紀ほど前だろうと言われてます。外見上は見分けがつかないし、シアンは寿命が長くて、侵略に何世紀もかけると言います」

秀和「そんなに？じゃあ、いつ本格的に侵略を始めるの？」

サナ「(ムツとして)何を悠長なこと言ってるんです。人間が環境を破壊したことで、すでにこの星が耐えられなくなりつつあるっていう時に、貴方がたはいったい...もしそうなったら、人間はこの星で生きていけなくなるんです...シアン以外は」

少し声を荒げたことで、何人かがサナを見ている。

インターネットコーナーにいた人は、その画面が急に切り替わるのに気付く。

緊急手配として秀和の顔写真が映し出され、目撃情報を求めてきている。

受付カウンターの端末も同様。

画面を見た人たちが、柵の影から秀和の顔を確認してささやき合う。

街頭（夕闇）

街頭TVの巨大スクリーンが突然切り替わり、特別報道として殺人犯『小田秀和』を緊急手配した警察の発表を伝えている。

顔写真を手にした警官やパトカーが増え、電気店の家電コーナーのTVも、全て秀和の顔を放送している。

『真皇国勇義結社』事務所（夕闇）

剥がれかけた看板を眺めている近藤。羽山が入ってくるとお辞儀する。

羽山「これだけのソース（情報源）だ。そのうち最優先回線で特定できるだろう」

近藤「ありがとうございます。それと...」

羽山「わかつとる。黄色は生かして連れて来いと言われてるんだろう。まったくもって悪趣味だが、仕方あるまい」

近藤「恐れ入ります。それにしても、著名な貴方が、どうして青の連中に協力を？」

羽山「協力だと？俺は取引しただけだ。すでに手遅れというならば、それもアリということだ」

近藤「...？（優先回線のコールに気付く）」

羽山は日本刀を手取る。

図書館（夜）

サナ「シアンは、この星で更に勢力を拡大しつつあります。権力も、その数も」

秀和「数を増やすって、地球人との混血も居るワケ？」

サナ「混血児の存在は、余り聞きません。成功例が極めて少なく、実際に混血の色として現れるかどうかは個体差があり過ぎて、ハッキリしてないと聞いてます」

秀和「はあ。でも、混血になったら血が混じるんでしょ？青と赤は紫、青と黄は緑で、えっと、赤と黄は？」

サナ「橙色（だいたいいろ）、オレンジです」

秀和「...」

サナが余りにも無関心でちょっと残念。

暗くなったのに気付き、時計を見るサナ。

サナ「そろそろここを出ましよう...？」

いつの間にか、人がいなくなっている。受付にも館内にも、誰もいない。

秀和「サナ、さん？」

サナ「いつの間に...」

トイレへと秀和を引っ張り込む。

戸惑う秀和。

サナは、入るなり清掃用具入れから長靴を取り出し、秀和に渡す。

サナ「ここのタンクには水を青くする洗浄剤が入ってます。うまく床に広げて下さい」

秀和「あっ、ハイ」

慌てて長靴を履いて作業にかかる。

サナは洗剤をありったけ用意する。

同・表（夜）

警官隊が幾重にも玄関を包囲している。その中に羽山、近藤の姿もある。

指揮しているのは堀田だ。服部が来て、

服部「非常口、全て押さえました」

羽山「今回は青の手勢だけでやるのか？」

堀田「お前たちの役目はココまでだ。ゆっくり見物でもしている」

突入部隊が特殊なゴーグルを装着している様子が見える。

近藤「（羽山に）あれは何をしてるんです？」

羽山「青い血に拒絶反応を示すからな、連中は。その予防策だろう」

堀田「狙いはイエローのみ。赤は好きにして構わん」

堀田が突入を指示し、嬉々とした服部を始めとする部隊が図書館へ侵入していく。

羽山は、堀田の横顔を嫌悪をこめて見る。

図書館内（夜）

部隊が進入してくる。ホールを抜けて閲覧室へ。人の姿は全くない。

服部「...（散開を命じる）」

3人ずつのチームになって捜索にかかる。

トイレに向かう服部。足元に水が漏れてきているのを見て、入口を固めさせる。

服部を含めた3人がトイレに侵入する。床は洗剤の染みた排水で浸されている。

その背後で扉が閉まる。振り返った3人を、天井からぶら下がったサナが襲う。

消してあった照明に器用に脚を絡ませて身体を固定したサナは、素早くゴーグルだけを狙って剥ぎ取ることに成功する。

ゴーグルを外された3人の視界には、一面の青い液体が広がる。

服部「うわあああああっっ」

目を覆う警官たちの顔面に、隠れていた秀和がカプセルを叩きつける。

仕上げに3人の後頭部をモップで強打し気絶させ、作戦成功を喜ぶ秀和とサナ。

× × ×

トイレの表。包囲を固めたまま動けない警官隊。

そこへ、扉を突き破って書籍用ワゴンが飛び出してくる。

ワゴンには、サナと秀和の服を着せられた服部たちが乗せてある。

トイレからは、警官隊の服を拝借したサナと秀和が、ゴーグルを装着して顔をわからないようにして出てくる。

秀和「負傷してます、見ない方がいい」

秀和とサナは、青い血が流れる傷口を手で押さえている（という演技）。

警官隊は、傷を余り見ないようにサナたちを外へ誘導する。

残りの警官らはワゴンを取り囲み、青い液に塗れた服部らを遠巻きに見ている。

同・表（夜）

サナと秀和が出て来る。負傷の手当てのため後方の車両へ連れて行かれる2人。

堀田「(舌打ちして)劣等種の2匹ごときに」

羽山「... (負傷警官を見やる)？」

サナと秀和が覆面パトカーを奪い、素早くこの場を離れていくところを目撃する。

油断したサナは、ゴーグルを外した顔を羽山に見られてしまう。

羽山「シアンには女は少なかった筈だな？」

近藤「?...そう聞いてますけど」

羽山「あの女、どこかで...？」

羽山は堀田に問い質す。

羽山「女は何人だ？」

堀田「...こんな時に何を」

羽山「この、ここにいるアンタの部下の中に、女は何人いるかと訊いてるんだ」

堀田「?...どういうことだ」

羽山「あの怪我をした女...あの顔に見覚えがある。青とは思えん」

堀田「(驚く)調べる！服部はどうした？」

騒然となる中、独り羽山はひたすら記憶を辿っている。

羽山の記憶 羽山邸 (何週間か前の夜)

遅くなった雪に付き添い、送ってくれた人物...女性...雪と女性の会話...

雪「(憧れの眼差し) 凄いサナさん、そんなことまでやってるんだ」

サナ「ARKは私の家も同然だし、みんな家族なんです。ただそれだけです」

雪「サナ、さん？」

考え込むようにして歩くサナを心配する雪。

迎えに出た羽山と、そこで出くわす。

雪「あ、おじいちゃん、ただいま」

羽山「お帰り。コチラの方は？」

サナ「初めまして、ARKの者です。遅くなってしまったので、お孫さんをお送りしてきました。それでは、私はこれで」

雪に手を振ると、ほとんど顔も合わせず素早く帰って行くサナ。

羽山は首を傾げるが、雪にせがまれて邸へ入っていく。

この時のサナと、今さっき逃げた女が羽山の記憶で一致する。

港～市場駐車場 (夜)

目立たない場所を選んで、用意してあったカバーで覆面パトカーを隠すサナ。

更に隠しておいた荷物や服を取り出し、着替えて出てくる。

秀和にも着替えを渡す。

サナ「男物はそれしかないから、我慢して」

秀和「(もう多少の事では驚かない) わかった」

早速この場を離れる2人。

警察署・署長室 (夜)

ニコやかに笑う沖田。

その前には、沈鬱な堀田に、憮然とした羽山に、恐縮しきりの近藤が居並ぶ。

沖田「やるやないか、その女。ええなあ」

近藤「お言葉ですが、女の知恵かどうかは」

沖田「わかるわかる、あの男の顔、見たやろ？アレはちゃうわ。女の方や。ええ度胸しとるわ」

堀田「面目次第もございません」

沖田「で、いつになったらワシの晚餐に、そのイエローを用意してくれるんや？」

堀田や近藤の顔ににじり寄り、笑顔をことさらに強調する沖田。決して逆らえない立場の者をいたぶって楽しんでいる。

羽山「私に心当たりが...」

沖田「お！（喜）あるんか？ホンマか？」

堀田「（怒気）貴様、それならなぜすぐに私に報告しない！何のための協力だ！」

羽山「...確証がなかったものでね」

堀田は羽山をにらみつける。

堀田「忘れてないだろうな？俺は覚えてるぞ。貴様は自分から我々への協力を申し出てきたんだ。同族を売り渡すために自分から進んで協力したい、と」

羽山「まだ糺碌〔もうろく〕はしとらん」

沖田「まあええやないか。そこまで言うんやったら存分に協力してもらおうやないか。

ついで言うと、ワシもちゃあんと覚えとるで」

羽山「...（沖田に対しては、礼儀正しく頭を下げる）」

沖田「そや（堀田に）まだおったやろアイツ...え～ほれ、乾、言うたか？」

近藤「！...（ギョツとする）」

沖田「ちょうどええやんけ。アレ、使えや」

堀田「（驚く）まさか？狂犬を使うんですか」

羽山「？...」

近藤「お言葉ですが、あまりに危険が大き過ぎるのではないかと思うのですが」

沖田「かまへんかまへん。ちょおこらで派手なん見たいやないか。どっかーんとやってまえ。あとで（首を切る仕草）しとけばええんや」

堀田「...わかりました。私の責任で処理します」

沖田「よろしゅう頼むで」

ご機嫌で部屋を出る沖田。SPに守られながら去って行く。

堀田と近藤は、憂鬱な深いため息をつく。

羽山「？...」

同・地下～拘禁室

エレベーターを最下層で降り、更に地下へと看守に案内される堀田、近藤、羽山。

羽山「ソイツは、青なのか？なぜ？」

近藤「それが...」

堀田「(憮然) 名前の通りの“狂犬”だ」

羽山「何をした？」

堀田「生まれつき痛覚のない奴でな。そのセイか、シアンの血を見ても全く動じん。
あらかじめ教え込んでおかないと、同朋だろうと殺しまくる。敵も味方もあったものではない。手に負えんガキだ」

羽山「何だそれは？そんな危ないのを外に出すのか...何を考えてる」

堀田「使うしかあるまい！俺だって好きで...」

苛立つ堀田を持って余し、苦い顔を見合わせる羽山と近藤。

拘禁室に着く。看守が扉を開け、通された3人は、足を緩めて近づいていく。

拘禁室には明かりもない。扉からの照明だけが、微かに中の囚人を照らしている。

堀田「乾か？署長の堀田だ。聞こえるか」

返事はない。動きもない。

3人が顔を見合わせた瞬間、音もなく扉に顔を見せている囚人、乾。

驚く3人を見てニヤける。痩せた初々しい外見に似合わない野太い声で、

乾「匂うな...匂う...赤が、2人か」

ゾットする羽山。近藤などは明らかに怯えまくって、扉から離れている。

堀田「お前に仕事だ。嫌なら、このまま帰る」

乾「なあ」

堀田「質問か？...！」

乾が舌を突き出す。舌を噛んでいた口の中は、青い血に塗れている。

堀田は嘔吐しそうになって顔を背ける。

乾「お前ら赤の匂いでさっきから勃ちっぱなしなんだよ、早くほどけよバカやろ」

静かにカラカラと笑う乾が、羽山や近藤には不気味でならない。

雑居ビルの事務所・ARKの支部（夜）

サナと秀和が到着すると、心配していたサナの仲間が次々に中へ誘導する。

バン〔播〕とユマ〔遊馬〕が、待ち兼ねたように顔を出す。

サナは、飛び切りの笑顔で2人に抱きつく。

バン「心配したよ、よく無事だった」

ユマ「お帰りなさい、サナ」

サナ「うん。ただいま」

感情を顕わにしたサナを、新鮮な驚きで見つめる秀和。

サナは、ほったらかしにしていた秀和をやっと思い出し、

サナ「あ、こちらが、例の」

秀和「あ、えと...ども。小田と言います」

バン「大変な目に遭ったね。事情は聞いています。出来る限りのことはするつもりだから、安心して下さい」

ユマ「しばらくここにいて下さい。それからゆっくり、お話ししましょう」

秀和「あ、...ありがとうございます、本当に」

サナが、学校の制服のままで手伝っている雪を見つける。

サナ「雪ちゃん、まだ居たの？ゴメンね。もう遅いし、誰かに送らせるね」

雪「あ、大丈夫ですよサナさん。今日はみなさん、特に忙しそうだし。おじいちゃんには留守電入れといたから」

忙しく、でも嬉しそうに立ち回る雪を、心配顔で見やるサナ。

バンとユマは秀和を応接室へ案内する。

秀和は事務所を見回す。壁のポスターやボードには、

「セラミック仕入予定」「水質改善 新規業種立ち上げ援助」「ナノテク産業・企業の監視」「植林予定地・人員割当」「アトピー被害を次世代へ及ぼす化粧品・成分+品目別表」「放射性廃棄物および医療・産業廃棄物の不法投棄監視班シフト+ローテーション」「原子力発電所周辺地域所在NPOへの放射能計測器〔ガイガーカウンター〕配布」「環境ホルモン一覧×サンプル」

などの具体的な活動内容や計画が、所狭しと並んでいる。

秀和が感心していると、雪が3人に紅茶を持ってくる。

雪は秀和に興味津々の様子。

ユマ「ありがとう雪ちゃん。悪いんだけど、向こうを手伝ってってくれる？」

雪「(残念)はい、ユマさん...あ、副支部長」

去って行く雪を、笑って見送るユマたち。

バン「ここでは、あの子だけがマゼンタなんですよ」

秀和「え？じゃあ、俺と同じ、その...地球、人？」

ユマ「彼女は私たちのことは知りません。話していないんです」

バン「純粋にボランティアで参加してくれているんだ。あんな子が1人でも増えてくれると嬉しいんだが...」

サナが仲間に指示をしたり、雪を気遣っている姿を見やる3人。

秀和「あの...彼女、サナ、さんは、どうして俺を助けてくれたんですか？」

バン「今や実務は彼女が取り仕切っていますね。私の支部長なんて肩書きよりずっと信頼されてますよ。言い出したらきかない子だけど、本当に優しい子です」

秀和「...はい」

バン「あの子にとっては、マゼンタもイエローも関係ない。血の色など本当はどうでもいいんです。ただ、せめてこの星を護りたい、侵略させたくない...それだけがあの子の願いなんです」

ユマ「(微笑)お陰で実務ばかり有能になってしまって...妙齡なんだから、もっと女の子らしいこともして欲しいくらいです」

秀和「いくつ、なんですか？」

ユマ「10歳です」

秀和は、飲んでいた紅茶を吹き出す。

バン「大丈夫ですか？」

秀和「(せき込む)じゅっ・・・十歳?? え？」

ユマ「話してなかったのかしら、あの子」

バン「我々は寿命が短いんです。シアンと反対でね。40年も生きれば、もう寿命と言われている」

ユマ「私が33、この人はもう40近いんです。マゼンタ...貴方がたの年齢で言うと、80近いのかしらね」

秀和「(ようやく落ち着く)はあ、そういう、もんですか。十歳...十歳か」

ユマ「私は、あの頃にはもう子供がいたし、あの子も沢山産んでくれるといいのにね」

秀和「あ、お二人の間のお子さんですか？」

ユマ「ええ、50人。みんな、この人との子供です」

再び紅茶を吹き出す秀和。

バンとユマは、ニコニコと穏やかな笑顔。

バン「今は世界中に散らばって、このARKの活動を支えてくれてます。NPOの環境保護などというのはどうも地味でしてね。中々賛同者が集まってくれないんですよ」

秀和「はあ...50人、ですか」

ユマ「本当はもっと欲しかったんですけど、この人も私も忙しくなっちゃって」

秀和「...(小さく呟く)もっと、って」

同・表(夜)

雑居ビルを見張る警察の指令車両。建物の陰から、羽山がビルを見ている。

堀田は部下に指示して、ビルの包囲と周辺住民の避難を指揮している。

乾は、近藤から渡された武器(鉞付ライフル)を手に取り、具合を試している。

近藤「危険ですから、そんなに乱暴に扱わないで下さい」

乾「ン?(振り向く)」

何気なく振った鉞が、近藤の肩から脇腹をザックリ切断してしまう。赤い鮮血。

羽山「!?・・・オイ！」

咄嗟に近藤の口を押さえ、騒ぎにならないようにする羽山。

乾「あ、ワリィワリィ」

ヘラヘラと笑う乾にあきれながら、羽山は警官に救急車を手配させる。

堀田「どうした?何があった」

羽山「見ての通りだ。助からんな、これは」

大量出血で血の気が失せた蒼白な近藤。死の一步手前という痙攣状態だが、警官たちに口を押さえつけられていて、声が出せない。

近藤「～あ...か・・・(息が止まる)」

堀田「相手を間違うな。標的はビルの中だ」

乾は、大きく息を吸い込んで爽快な気分を味わっている。

乾「イイ匂いだろお。忘れたのかオメエら？」

堀田「(興奮を隠して、羽山に)まだか」

羽山「孫を巻き込まないことが絶対の条件だ。最初からのな」

堀田「～(わずらわしい)くどい」

ビルの前にタクシーが到着して、ARK事務所から人が降りてくる。

雪とサナ、他にも数人がやってくる。

雪「すみません、タクシーなんか」

サナ「こっちこそ、こんな遅くまでごめんね」

雪を手招きして耳打ちする。

サナ「家でニュースを見て驚くかも知れない。でも信じて。私は決して嘘はつかない」

雪「サナさん？」

サナ「いずれ、ちゃんと話すから。真実を」

雪「え？…」

タクシーを出させるサナ。不安顔の雪を見送り、皆と事務所へ戻っていく。

堀田「これでいいんだろう？」

羽山「…ああ。好きにしろ」

堀田はビルを固める警官隊に指示をする。

乾は、その指示を聞いているのかわからない。

羽山は、気分が悪くなってビルから少し離れる。刀を手に、深くため息づく。

ARK事務所内（夜）

皆は後片付けをしている。

サナは奥の応接室に行き、秀和とバン、ユマらと話している。

バン「そうだね。雪ちゃんにも話さなくちゃならない時が来た、ということか」

サナ「てっきり、もう帰ってるとばかり思ってたから、この人（秀和）を見られる危険を忘れてた。私が軽率でした」

ユマ「自分ばかり責任を背負っても、何にも解決しないわ。貴方はよくわかっているでしょう？」

バン「さし当たってどう話すべきか考えよう」

サナ「ハイ」

秀和は、楽しそうにサナをジッと見ている。

サナ「何？」

秀和「十歳には見えないな、と思って」

サナ「……」

無表情だが、口が何か言いたげに動く。

ユマ「そうそう、どうして言わなかったの？私は本当は十歳なんです、って」

サナ「別に、話す必要ありませんでしたから。そんなことより、これから貴方をどうするか、決めないといけないのよ」

バン「そんなに焦っても仕方ないよ。ゆっくり考えてもらおう。どうすべきかを」

サナ「そんな余裕は・・・」

ヒステリックになりつつあるサナを押さえる秀和。

秀和「落ち着いてよ、ちょっと」

サナ「貴方が変なことを言い出すから」

秀和「俺をどうするかって話をされても困るんだ。俺は、その、俺がどうするか、それを自分で決めたいんだって」

サナ「...」

秀和は、落ち着いているが、何かを堪えているような重い表情になっている。

バン「そうだね。その通りだ」

秀和「本当に仲のいい母娘だった...救命士の資格も持ってて、尊敬できる先輩だった...

その人と子供を殺したんだ、あいつら」

サナ「...」

秀和「笑いながら、殺したんだ。俺の目の前で、殺されたんだ」

知らず拳を握っている。重い空気の中、腹が鳴り出して緊張が解ける。

秀和「その前に、メシ、いいですか？」

バン「そうだね。人間ちゃんと食べないとね」

笑いが起こり、和やかになる。

サナだけは少しムツとしているが。

× × ×

事務所の非常口。

ゴミを片付けているARKメンバーが、階段を登ってくる乾に気付く。

メンバー「こんばんは」

乾「(爽やかな笑顔)よお」

話しかけた時にはもう、鉈でメンバーの喉を突き刺している。

黄色い鮮血が噴き出す様に、恍惚とする乾。

乾「(匂いを嗅ぐ)いいねえ、この香り」

タクシー車内(夜)

鞆を探っている雪。見つからない。

雪「(ため息)運転手さん、さっきのそこへ戻ってもらえますか？」

運転手「忘れ物ですか？」

雪「携帯、置きっぱにしちゃった。あ、裏道知ってるから、教えますね」

ARK事務所内(夜)

メンバーが携帯電話をサナに渡す。

サナ「まいったな。誰か持って行ってあげないと」

車を出す相談をしていると、非常口の方から悲鳴が聞こえる。

サナ「何？」

メンバーたちが逃げてくる。

逆にサナは非常口へ駆けつける。その瞬間、鉈に突き刺される。

サナ「・・・(胸を押さえて)シ、アン！」

そのまま突き飛ばされるサナ。雑多な荷物の中へ倒れこみ、埋もれる。

乾はライフル銃を構え、逃げるメンバーたちに乱射し始める。

おにぎりを食べていた秀和も、騒ぎに気付いて事務所を窺う。

秀和「...嘘、だろ」

乾は、動くもの全てを手当たり次第に撃ち、負傷したARKのメンバーに鉈でとどめを刺していく。黄色い血が、床や壁やデスクを染めていく。

柑橘系の匂いが強くなっていく惨劇の場で、痛快な笑みを浮かべている乾。

秀和「何だ、アイツ...」

バン「皆を上階へ！カプセルは？」

ユマ「残りは全部持ってこさせます」

秀和は貰ったカプセルを思い出し、ポケットから取り出す。

秀和「俺がコレを。早く皆を！」

バン「わかった」

ユマ「(気付く) サナは？あの子は...」

秀和「！...」

× × ×

非常口を登ってくる雪。携帯用のMP3プレイヤーを聞いてリズムを取っている。

ふと扉の下の黄色い血溜まりに気付く。

雪「？(触ってみる)」

照明が足りないので、色はよくわからない。

雪「なんだろ？(匂う)ミカン、かな？」

首を傾げながら事務所へ入り、

雪「あの～、携帯忘れたみたいで、ここに...」

ヘッドフォンを外した耳からは悲痛な悲鳴や銃声が、見開いた目からは黄色に染まった地獄絵のような殺戮光景が、ほぼ同時に飛び込んでくる。

雪は、あまりのことに息が出来ない。黄色い血の匂いが室内に強烈に充満していることに気付き、鼻と口を震える手で塞ごうとする。

雪「あ・・・ああ・・・う・・・」

乾の、恍惚とした狂気の姿も目撃する。

黄色い血を噴き出させている人間の頭部を鉋で割り、押し開こうとしている。

乾「ン？」

気付いた瞬間、雪を撃っている。床に広がる血溜まりに、赤が混じる。

表・向かいのビル(夜)

部下に案内させて見晴らしの良い場所へ登っている堀田。

堀田「風下だろうな？良く見えるのか？」

部下「大丈夫です」

満悦する堀田。別の部下が報告に来る。

部下「封鎖区域にタクシーが入り込んでいたようですが」

堀田「サッサと追い出せ。一々報告するな」

待ち切れない様子で双眼鏡を覗き込む。

A R K事務所の惨状が見える。堀田は美味そうに鼻から大きく息を吸い込む。

堀田「(喜色満面) 久し振りの見物〔みもの〕だ。やはり特等席でなくてはな」

A R K事務所内(夜)

乾が近づいてくるのを、扉の陰で待ち構えている秀和。

呼吸を整えようとするが、身体の震えがどうしても止まらない。

秀和「くそ...くそ...くそ...くそ...くそ...」

乾がすぐそこまで来ている。

カプセルを投げる秀和。

破裂した青い液体が、血糊となって乾にベッタリ付着する。

乾「(平然)何だ?血じゃねえな、コレ」

秀和「うそ?平気、なの」

いきなり銃撃が襲ってくる。

間一髪でかわした秀和が、逃げようとして転んだところをバンが庇う。

撃たれたバンの背中から、大量の黄色い血が流れ出る。

乾は、秀和の腕を鉈で突き刺す。秀和の腕から赤い血が流れる。

乾「何だ、赤か。さっきのは殺しちゃったからなあ。お前、キープな」

秀和を蹴り倒し、銃床で後頭部を殴りつけて気絶させる。

全く表情を変えないまま、向き直る。

残ったコマたち数人が、部屋の奥でバリケードを作って身構えている。

乾はニッコリ笑うと、手榴弾を取り出してピンを抜き、ヒョイと投げる。

悲鳴と共に、至近距離で爆発する。

乾「(炎を浴びても、平然と)アツい...」

同・表(夜)

パトカーの車内で目を閉じている羽山。警官が呼びに来て、仕方なく車を降りる。

羽山「...(深いため息)」

強烈な匂いに顔をしかめる羽山。黒煙を上げている窓を仰ぎ見る。

A R K事務所内(夜)

羽山は、数人の警官が見回っている中を奥へ進んで、堀田を見つける。

堀田は秀和を拘束して得意顔。

部下が「イエローの女1名、生存」と報告すると更に喜び、連れてこさせる。

秀和「サナ?...サナ!サナ!」

サナは鉈に貫かれた携帯電話を握り締めたまま、まだ朦朧としている。

手の傷もひどく、黄の血痕だらけだ。

堀田「携帯のお陰で死ななかったか。運がいいのか、悪いのか(笑)」

羽山「?...携帯」

気付く。あれは、雪の携帯電話?

激しく動揺してサナを揺さぶる。

羽山「おい!どうしてコレを持ってる?コレは雪のだろう?おい!女!!!」

サナ「雪、ちゃん...」

羽山「そうだ、私の孫の雪だ」

サナ「忘れて...届けて、あげなくちゃ...」

羽山「~(らちが明かない)あの暴れた青はドコだ?ドコに行った?」

サナを放り出し、乾を探す。

どこもかしこも黄色い血が飛び散り、目の眩むような光景が広がっている。

その中に一点、赤が混じっているところがあった。非常口の辺り。

そこに、乾がいる。何かを舐めている。

近づいていく羽山。鼓動が乱れ、胸が苦しい。

乾が舐めているものがわかった。死体。雪の死体。

身体中の銃痕から赤い血を流して死んでいる雪。その顔を楽しそうに舐めている。

羽山「！（極限の憤怒）」

気付いた時にはもう、羽山の日本刀は乾の舌と両腕を切断している。

青い血が噴き出して雪〔の死体〕に降りかかる。

乾は、ニヤけた顔で羽山を見る。痛みなどまるで感じていない。

その首を日本刀が切り飛ばし、更に何度も切りつけ、青い血に塗れた肉片となる。

羽山は乾の胴体を足で壁に押さえつけ、力を込めて切りつける。

見ていた警官が、堀田に報告する。堀田は舌打ちして、羽山の拘束を命じる。

朦朧としたままのサナに呼びかけていた秀和は、惨殺音と悲鳴に顔を上げる。

そこでは羽山が、阿修羅の形相で警官たち〔シアン〕を切り殺している。

拳銃を構える暇も与えず、凄まじい剣圧で身体ごと吹き飛ばしていく。

床や壁の血溜まりは、見る間に黄色から青へと塗り変えられていく。

羽山は、怯んで逃げ出す堀田の足首を切りつけて、動けなくする。

生き残ったのは、もう堀田だけとなっている。

羽山は荒い息をつき、刀を床に突き刺して、膝をつく。

秀和は何が起こったのかわからず、言葉も出ない。

堀田「貴様...よくも、こんな真似を」

羽山は極度の疲労を堪えて何とか息を整え、秀和を見る。

羽山「赤、だったな、お前...」

秀和「...（頷く）」

羽山「手伝え。ここから、逃がして、やる」

秀和「？...（サナを見る）」

秀和の腕の中で、意識を失いかけているサナ。

羽山の車・車内（夜）

秀和が運転し、後部座席には雪を抱えた羽山が乗っている。

羽山はずっと、泣いている。

サナは助手席で気を失っている。

堀田は縛り上げられ、隅に置かれている。

堀田「こんな真似をして、ただで済むと思って・・・（悲鳴）」

羽山が、鞄で堀田の足を押し付けている。

秀和「これから、どうする気ですか？」

羽山「カーナビの通りに行け」

秀和「...」

『真皇国勇義結社』事務所（夜）

羽山の指示でブラインドを閉め、デスクのスタンドだけ照明を点ける秀和。

羽山は、死んだ雪をそっとソファに寝かせて、優しく頭を撫でている。

堀田は床に放り出されて放置されている。

秀和は、まだ頭を押さえて蒼白なサナを座らせて、傷の手当てをする。

堀田「無駄だ。どこに隠れようと見つかる。俺を人質にとっても意味は無いぞ」

まだ何か吠えているが、羽山も秀和も、聞こえているが相手にしない。

羽山「...小僧」

秀和「? ... (自分を指差す)」

羽山「その抽斗〔ひきだし〕を開けてくれ。暗証番号は裏に貼り付けてある」

秀和は、メモを見つけてその通りにダイヤル鍵を回し、抽斗を開ける。

中にはUSBメモリーがある。

羽山「私にはサッパリだが、甥が詳しくてな。こういう時の為に準備してあった。こう

いう時、というのが、きて欲しくはなかったんだが...

雪を見て、陰惨な笑みを浮かべる。

秀和「何が、入ってるんです？」

羽山「青い血の連中の侵略、目的、潜伏先...私にわかる範囲での、全てだ。報道機関に

は連中の手が回っているからな。ネットワークとやりに接続すれば、どんな規制も

潜り抜けて情報をタレ流すそうだ」

秀和「本当に?じゃあ、コレがあれば、青の奴らを」

羽山「一泡吹かせてやれるかも知れん」

秀和「(はしゃぐ) サナ、サナ!聞こえてる?サナ。助かるかも知れないぞ、サナ」

サナ「...たず、かる？」

堀田の笑い声がワザとらしく響く。

秀和「笑ってる! どうせ『そんなことしても無駄だ』とか『既に手を回してある』とか

言うんだろ。ワンパターンなんだよ」

堀田「いいや。成功するかもな」

秀和「え? (拍子抜け)」

堀田「やってみるといい。意外と簡単に世界中に我々のことが知れ渡るかも知れん。それ

も面白くていいだろう」

秀和「何、言ってんだアタ？」

堀田「それが知れることなどありはしない。そんな幻想を抱いて侵略をする間抜けはい

ない。貴様ら赤は、どうだか知らんが」

羽山「ブラフだ。放っておけ」

堀田「やってみればわかる。実際にな」

秀和「どうとでもなる、って言いたいのか？」

堀田「それも違うな。考えてもみる。我々がやっていることが何なのか。貴様らで言う

テラフォーミング〔惑星改造〕。それがどういうものかを」

秀和「惑星、改造？」

堀田「貴様らもシミュレーションぐらい知ってるだろう。人口が増え過ぎれば、この星

では人間が住めなくなる。そうしたら他の惑星へ移住するしか手はない」

秀和「...」

堀田「火星でもどこでもいい。仮に行けたとしてだ。ここと同じ環境なワケはない。暑

すぎたり寒すぎたり、水がなかったり酸素が足りなかったりだ。さてどうする？」

秀和「...そりゃ、作る、だろう」

堀田「そうだ！自分らに適した環境にその星を作り変える。それが惑星改造だ。だがもし、そこに別の生き物がいたらどうなる？今までその星の環境で生きてきた生物が、環境が激変しても生きていけるか？火星人が、地球で生きられるのか？」

秀和「...」

堀田「貴様らがそこで火星人を発見したとしよう。もう地球には戻れない。火星で暮らすしかない。だが環境を変えれば火星人は死に絶える。さあどうする？火星人に悪いからと、そこで酸素を使い果たすまでジッとしてるのか？」

秀和「.....」

堀田「断言してやろう。貴様らは環境を変える。その後で『非常事態だった。やむを得なかった』とか同情的な言葉を並べて正当防衛を主張するだろう。何匹かは保護するかもな。天然記念物とやらに指定して絶滅を防いでやるかも知れん。だが火星人間から見れば、貴様らは突然やってきた侵略者以外の何だと言うんだ？」

秀和「.....」

堀田「貴様らの同情など偽善にすらならない。もっとも、我々は同情すらしないがな」

羽山「よく喋る人質だな」

堀田に刀を突きつける。

堀田「抵抗があるかも知れん。だがそんなものは力でねじ伏せる。圧倒的な力の差があればイイ。この星での繁栄もそうだったろう？ 思い出せ。生活圏を広げる為に、より巨大な社会を作る為に、貴様らが何をしてきたかを」

秀和「?...」

堀田の声にノイズが混じるようになってきている。段々大きくなってくる。

堀田自身は気付いていないらしい。

堀田「侵略とはそういうものだ。完璧を期す為にはあらゆるシミュレーションと綿密な調査結果を基にした分析が不可欠だ。それがあって初めて成り立つ。最終段階に近づきつつある我々の正体をバラしてやると脅されて、それで我々が躊躇するとでも思ったか！」

意味を成さない言語に似たノイズが、更に酷くなる。

堀田の言葉はもうほとんど聞き取れなくなっている。

耳が痛み出し、耳を押さえる秀和。

堀田はノイズに気付かず喋り続けている。

秀和は、苦しみながらしゃがみ込む。

秀和「耳が...痛い...」

サナはフラつきながらも立ち上がり、辺りを見回す。

秀和「サナ？」

サナ「聞いたことある...こんな、現象...」

秀和「え？(よく聞こえない)」

ノイズの割り込む間隔が短くなってきている。堀田は気付かないで喋り続ける。

サナ「音のしない攻撃...人体だけを狙い撃つ兵器...」

秀和「え？」

サナ「標的以外には、ノイズが...聞こえ...」

秀和「それって...」

砲撃が襲ってくる。壁を通過した音波のような衝撃は、一瞬で堀田の身体を吹き飛ばし、細切れにする。肉体を失って崩れ落ちる堀田。一面の青（血）。サナの胸にも穴が開き、壁に吹き飛ばされる。青に黄（血）が混ざる。続いて羽山が、無数の穴を穿たれてズタズタにされ、吹き飛ばす。緑がかった壁の血に赤が混じる。

秀和「あ・・・ああ・・・あ...」

血が床を、壁を染めあげる部屋の中央に、秀和が一人だけ生き残っている。恐怖に声も失い、ふと目を上げると、秀和は所属不明の軍隊（一個小隊）に囲まれている。特殊ゴーグルを装備した小隊全員が、ただ静かに音も立てず、銃口を秀和に向けて微動もしない。

秀和「あ・・・ああ・・・あ...」

サナを見る。死んでいる。

秀和「あ・・・ああ・・・あ...」

羽山を見る。死んでいる。

秀和「あ・・・ああ・・・あ...」

向けられた銃口を見る。口がわななく。耳の奥で動悸が鳴り響き、こめかみに鈍痛が走る。股間がむず痒くなる。気付かないまま、ボロボロ涙をこぼしている。

秀和「あ・・・ああ・・・あ...ああああああああ」

叫ぶ。首を振る。思うように動かない腕を、脚をバタつかせる。

小隊の隊長が合図して、正面の1人を残して銃口を下げる。

そこで部下の1人が、秀和の腕の傷を指し示す。

隊長がゴーグルを外して、傷を見る。

秀和の傷口から流れる血は、濁っていて赤よりも濃い、どちらかと言えば、紫。

隊長「鑑定しろ」

部下が検査キットを持ってきて、震える秀和を押さえつけ、血を採取する。

薬品と混ぜ合わせ、サンプルと比較する。

秀和「?...」

部下が、隊長に頷いて見せる。

隊長「混血か...まあいい、今から対象を保護監察要請に切り替える。指令者へ報告」

秀和「?...」

ただ、茫然とするばかりな秀和。

小隊は、ほとんど音も立てずに撤退していく。

その部下の1人に手を引かれるまま、連れて行かれる秀和。

秀和「?...（事態が全く飲み込めていない）」

『沖田正嗣 選挙事務所』内（未明）

沖田が電話を受けている。

沖田「そら保護せなかんわな。しゃあないわ、色からしたら青と赤で紫、いうんが当た

り前やないか...あ？あぁ、帰したってエエよ...かまへんやろ、どうせどこも行くところなんぞあらへんのや...あぁ、よろしゅう」

電話を切り、すぐ別のところに電話する。

沖田「(上機嫌)沖田です。こない早ようすいません...いやおおきにおおきに、私なぞまだまだ若造て言われてまして...はい、報告の通りですわ。署長の人事ももう当てがありますよって、ご心配には...はい、任したって下さい、いつも通りに...ほな、失礼します」

電話を切り、大あくびをする。外を見て、

沖田「働き過ぎやなワシ。ちょっと遊ばか」

ずっと足の裏で踏んでいたものをんで引っ張り上げる。

近藤の死体だ。乾に切られたままの姿で赤い血に塗れている。

S Pが護衛する事務所の奥で、肉と骨を噛み砕く不快な咀嚼音が繰り返される。

雑居ビル前(黎明)

小隊から解放される秀和。メモを渡され、突き放すように放り出される。

トボトボと、歩いて行く。

秀和の独白『死なずに済んだ...どうやら、この血のお陰らしい.....赤紫の、混血の、血の...』

メモを見る。研究所について書かれている。

独白『研究所へ行くように言われた。それまでは、好きにしていいたい...常識や、今まで生きてきたことの全てを、アッサリと引っくり返した2日間は、こうして終わった』

当てもなく駅へと向かう。現在地がどこかを確認しようと、辺りを見回す。

秀和「...(サッパリわからない)」

自宅アパート

帰宅する秀和。茫然と立ち尽くす。

異常なほど整頓されている室内。その至る所に青い『検査済』ステッカーが貼り付けられている。色が赤かったら、まるで差し押さえだ。

独白『もう、終わったんだ...これからは、別の人生が待ってる。現実というやつを思い知らされるのは、まだ少し先だ』

TVを見つめる秀和。

右翼団体事務所の殺傷事件と鎮圧が報道され、羽山と孫の死亡が淡々と伝えられている。

独白『サナのことは、ニュースになってなかった。他のイエローのことも.....まるで、最初から存在してなかったように...』

サナがやったように、カッターで指先を少し切り、血を出す。紙の上に垂らす。

紫色の染みが広がっていく。

秀和「...」

街中

行き交う人々を茫然と眺めている秀和。

買い物客。学生服の集団。子供づれ。交番に立つ警官。走り回る配送業者。

独白『この中に、黄色い血をした人はどれくらいいるだろうか？青い血をした人は？…』

紫の血をした人は…』

交差点で事故が起こっている。

集まりつつある野次馬に紛れ込む秀和。

車同士の軽い接触らしいが、運転手が額から血を流している。赤い、血だ。

秀和「…（気付く）？」

怪我人のかたわらに、茫然と立ち尽くしている女性がいる。

一瞬その姿がサナと重なるが、すぐ別人と気付く。

秀和「……」

救急車のサイレンが近づいてくる。

独白『これからどうなるのか…どうなっていくのか？…そんなの、わかるわけがない。』

ただ、間違いないことは…』

絆創膏を貼った指を見つめる。サナを思い出す。

記憶の中でのサナの顔は、すでに輪郭がぼやけてきている。

救急車が到着する。

秀和は、事故現場を離れて、歩き出す。顔を上げる。

独白『世界は、とっくに変わってる…』

事故現場の喧騒が、徐々に遠ざかっていく…

了